

■ 書 評



向精神薬の薬物動態学 —基礎から臨床まで—

加藤隆一 監
鈴木映二 著
星和書店 2013年3月
256頁, 定価 3,990円

臨床薬理学の基礎的な分野に薬物動態学がある。精神科に限らず治療薬の特徴を知るためには、この薬物動態学の知識が必要である。とはいえ、この分野は臨床家にはどうもとつきにくい。学生の時に薬物動態や薬物相互作用などを複雑な数式で示され、重要性を教官に力説された記憶はあるものの、実際に薬物を処方する今となっては、あまり気にとめなくなったのが現実ではなからうか。その理由はいくつかあると思われる。薬物動態学の専門家が相互作用の重要性を強調するあまり、ごくまれにしか使われない薬物どうしの相互作用をあげたり、一般には安全域の広い向精神薬のわずかな血中濃度の変化を強調しすぎたりしたせいもあるかもしれない。おそらく臨床家はこのような点に多少とも違和感を持つのであろう。それが薬物動態への無関心につながっているとするれば、残念なことである。しかし最近、精神科治療では多剤併用の弊害が精神科内部からのみならず、マスメディアなどからも指摘されている。また最近増加している高齢者や身体疾患を伴う精神障害の治療では、すでに投与されている内科治療薬との相互作用に注意しなければならなくなっている。

このような状況で、われわれ精神科医にとって読みやすい薬物動態の教科書が求められている。ここにタイミングよく発刊されたのが本書である。すでに向精神薬の相互作用についての成書としては、日本総合病院精神医学会から「向精神薬・身体疾患治療薬の相互作用に関する指針」が発刊されている。また大著であるが Sandson による「精神科薬物相互作用ハンドブック」の翻訳も出版されている。しかし、前者には理論的な部分はなく、後者にはわが国で使用されていない薬物についての記述が混入しているという、それぞれ残念な点がある。本書には、臨床に携わりながらも薬物動態の理論と実際に詳しい著者が、わが国

の精神科医にむけて執筆しているという特徴がある。

本書の前半には、薬物の吸収、分布、代謝、排泄という薬物動態の基礎的知識の記述がなされている。ここは従来の薬物動態学の成書と同様の内容であるが、取り上げられる薬物はすべて向精神薬なので、精神科医が読んでも興味が損なわれることはない。むしろ、いくつかの意外な事実ではっとさせられたことがある。たとえば、抗精神病薬の錠剤と液剤では最高血中濃度に到達する時間に差がないことである。液剤の方が何となく即効的と信じている臨床家も多いのではないだろうか。

後半は高齢者、女性、身体疾患の患者における薬物動態の特徴が述べられ、最後に最近発売された抗うつ薬、抗精神病薬、抗認知症薬、抗てんかん薬について一つ一つ詳しく薬物動態の特徴や相互作用が記述されている。それぞれの薬物の添付文書よりも情報は豊富であるにも関わらず、記載が煩雑にならないよう要約が用意されているので読みにくいことはない。

本書を一読して感じるのは、とにかく臨床家にやさしいということである。薬物動態の数式は最小限にされている。そのかわりに、図や表が多数掲載され、またそれらのすっきりとしたレイアウトは読者の読みやすさを大いに助けている。精神科医が使い慣れていない薬については、一般名とともに必ず商品名もあげられている。また、薬物相互作用については、臨床的な視点が常に保たれており、理論的には重要かもしれないが、ごくまれな併用について長々記載するようなことはない。たとえば、HIV 治療薬や抗がん剤との向精神薬の併用などは、一般の精神科医はあまり経験しないであろう。また、市販がとつくに終了してしまつたチオリダジンとの併用注意も現時点では意義が乏しい。むしろ、本書では実際の臨床で問題となる可能性のある例が主として取りあげられている。たとえば、フルボキサミンを服用していた患者にデュロキセチンを併用すると、後者の血中濃度が数倍に上昇することが、相互作用の1例としてあげられている。これなどは実際の臨床でも起こりうることであろう。

本書は参考資料として診察机の上に常備しておいてもよいかもしれない。またいわずもがなかもしれないが、B5判で250ページ近くもある本格的なモノグラフで、この値段というのはいふんとオトクなのではあるまいか。

(仙波純一)